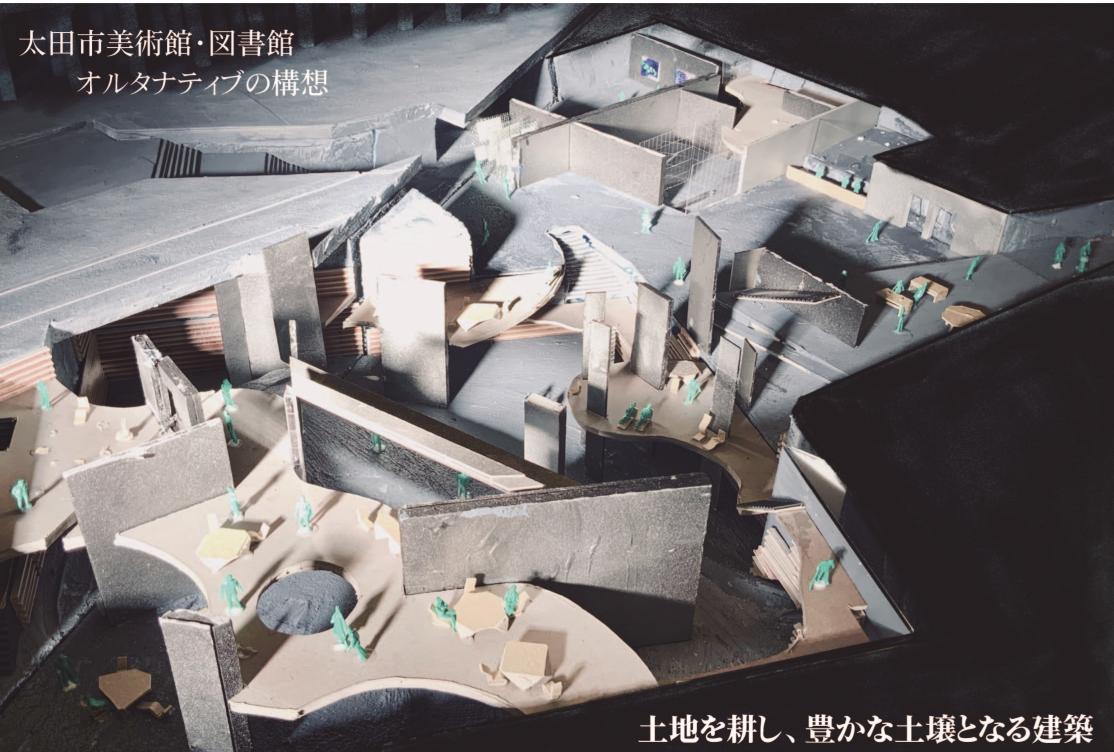


太田市美術館・図書館 オルタナティブの構想



土地を耕し、豊かな土壤となる建築

敷地は群馬県太田市の駅北側である。要求された機能は美術館と図書館を含む文化複合施設。

通常駅前空間は、人の行き交いが多いことから、消費活動の場にあてられる。デパートや商店街、飲食店などが建ち並ぶのがよくある駅前の光景だ。今回はあえてこのような敷地に、消費活動とは無縁な文化の空間を提供する。

この場所だからこそ、創ることのできる文化的な空間があるはずだ。

街と文化、そして建築が強力に結び合わされた美術館・図書館を提案する。



敷地の周りの街の風景に目を向けてみる。小規模の昔ながらの商店がいくつも見られる。それらは、決して栄えているとは言えないけれども、穏やかで人間味に溢れる景観を生み出している。

注意してよく見てみると、店舗のファサードはとても不思議だ。例えば、「合カギアトムの塗料の店」、「提灯と国旗を売る釣具店」など、一見でたらめな組み合わせの売り物の名が並ぶ。ただ、もちろんこれらはでたらめなんかではない。店を営む人々の職歴の変遷が、建築のファサードに刻まれているのだ。

私たちは、街の中にある、そのような人々の生きてきた歴史の片鱗がある種の温かみをそこに与えていることに気づく。

歴史の積み重ねが、文化を育む。ならば、文化的な空間を考えるヒントは、このような街のささやかな光景の中にあるのかもしれない。

大規模な都市開発が行われる中心街に、ささやかであっても、ここに生きる人々の歴史を感じられる空間はあるだろうか。



人が生きるという営みが、時代をこえて、歴史として脈々と受け継がれて行くように、ある時間軸の中で建築が街の中で受け継がれ、愛されるようなあり方を目指す。

私の提案するオルタナティブは、美術館・図書館を、地下に埋めるというものである。

本とアートに満たされた地下空間は、文字通り、敷地を耕し、街を育む豊かな土壌として機能する。開発する開発する余地の残った地上レベルには、今後、文化的な空間を下地にして、これまでにない新しい街ができる行こう。街が育つという、時間軸をもった成長の過程で、美術館と図書館は、その出発点となり、この街の歴史の一端を担い、人々に愛され続ける。

そうなることを願って、設計を進めた。

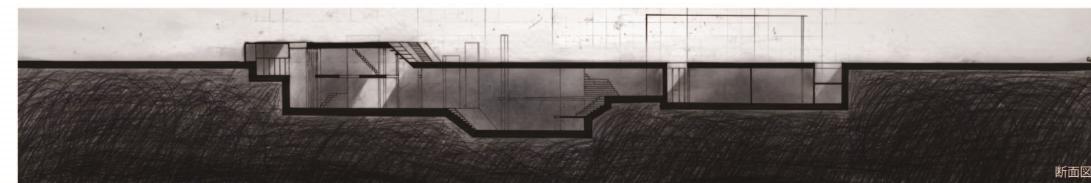


エントランス



平面図 G1 - 7600

平面図 GL - 5500



断面図